月族

Legend of the Moon
The Celestial Princess

今村恭子
Imamura Kyoko

江苏工业学院图书馆
藏书章

月族

海竜社

今村 恭子　いまむら・きょうこ

東京生まれ。てんびん座。血液型不詳。
■今村恭子公式ブログ『月族の会』
http://www.tsukizoku.com

装幀……川上成夫

装画……天野喜孝

月族
2006年2月20日　第1刷発行

著　者……今村恭子
発行者……下村のぶ子
発行所……株式会社　海竜社
〒104-0045 東京都中央区築地2-11-26
電話　03-3542-9671
FAX　03-3541-5484
郵便振替口座　00110-9-44886
ホームページ　http://www.kairyusha.co.jp
印刷・製本所…図書印刷株式会社
落丁本、乱丁本はおとりかえします
©2006, Kyoko Imamura, Printed in Japan
ISBN4-7593-0919-5

月族

主要登場人物

【薬子の世界】（現代）

薬子（クスコ）……まだ恋をしたことがない十九歳の大学生。

萬里小路飛鳥（までのこうじあすか）…銀杏（いちょう）屋敷に住むなぞの青年。

湯本文哉（ゆもとふみや）……月好きの青年。

リンゾウ君……薬子に恋を打ち明ける美大生。

高田月昌（たかだつきあき）……褐色の肌をしたサーファー風の青年。

飛鳥の母親……薬子にアルバイトを依頼する美しい女性。

まーちゃん……薬子の母親。

青野（あおの）君……薬子の同級生。

【プラリネの世界】（古代）

プラリネ……月の国の王族の血を引く。

シーラ……北人の魔術師。

グリ……去勢した若い馬賊（ばぞく）の青年。

ロハン……ノクツツ村の青年。

ハンジン……馬賊の大将。

帝（みかど）……西の帝国の皇帝。

フォン……帝の教育係だった老女。

アリギラ……ムルサク人の予言者。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

まだこの年齢まで、わたしは一度も男の人のことを好きになったことがない。
なりかけたことは幾度かあるが、それが恋かどうか、はっきりする前に、いつだってその仄かな思いは消えてしまっている。
どうして自分はみんなのように気楽に恋することができないのだろう。
そもそも、世によく聞く、男性との運命的な出会い、などというものは皆無だ。
出会いがないのだから別れもなく、恋人と別れたと言って泣いている友人を、わたしは珍しい動物でも見るようにいつも眺めてしまう。
なぜ、この子はこれほどまでに絶望しなければならないんだろう。

どうして、これほどまでに他人に依存して生きることができるんだろう、と。
他人なんかを信じるから、このような酷(むご)い悲しみを背負うことになるわけで、泣いている友人たちの話を聞きながらも、わたしはどこかで馬鹿馬鹿しい、と呆(あき)れている。
でも、同時に、うらやましいとも思っていた。
自分ではない他人のことをそんなに好きになることができる、その心の仕組みを知ってみたい。
誰かを愛することができる人間の素直さが欲しい。
自分に誰かを愛することなんてできるのかしら？
それはどういうもの？
どういう感じだろう。
アタタカイの？
それともスズシイ？
ヤワラカイ？
マルイ？

フワフワしている？
でも、いつも想像するだけ。
想像しても、経験がないのだから、実感がわかない。
もしかしたら、わたしは人間として、何か大切な感情というものを最初から失っているのかもしれない。
そのことで、うじうじ、いつも悩んでしまう。

真夜中、わたしは洗濯をする。
二十四時間営業のコインランドリーで、深夜、流行りの小説なんかを眺め読みながら、衣服が乾くのを待つのが最近の日課。
そんな遅くに女の子が一人洗濯だなんて、とまーちゃんによく注意される。
まーちゃんとは母のことで、子供の頃からわたしは、そう呼んできた。
一方、まーちゃんはわたしのことをクスちゃんと呼ぶ。
薬の子と書いて、本名はクスコだが、クスコは言いづらいらしく、勝手に名付けておきながら、クスコちゃんとは呼んでくれない。

洗濯をしながら主に読むのは外国の若い作家が書いた恋愛小説。
日本の作家のものは、どうも気恥ずかしくて……。
でも、真剣に読んでいるというわけではなく、なんとなく眺めているという感じ。
人が人を好きになる理由を知りたくて、小説を読んでいるのだけど、読めば読むほど、ますます分からなくなる。
だから、作家が真剣に書いている愛情場面で、わたしはいつも、嘘(うそ)だあ、と苦笑してしまう。
自分のことだってちゃんと分からないのに、赤の他人である人のことを、いくらかっこいいからといって、そう単純に好きになれるものかしら。
世界で一番難解なものが自分で、だからか、そんな自分と真剣に付き合ってしまうと、つい、くたくたになってしまう。
つまり、自分に。
全自動タイプの洗濯機の上に腰かけて、まるで映画のワンシーンさながら、何を気取って本なんか読んでいるふりをしているのか、自分に恥ずかしくなることはし

よっちゅう。
正面のガラス窓に映った自分の顔は、絵に描いたような間抜け顔で、ため息がこぼれてしまう。
それでも、いつか、恋はしてみたい。
目を真っ赤に腫らして、恋人との別れを語る友人たちがうらやましくて仕方がないのだ。
自殺をしそうな勢いで泣きわめく彼女たちを、わたしは心底うらやんでいる。
いつもその聞き役になるしかない自分が、ちょっとだけ情けなくもある。
でも、恋が何か、分からないのだから、不憫に感じることもない。
人を好きになるのは、ものすごく体力がいることなのだろう、と想像しながらも、やっぱり憧れている。

コインランドリーを出ると、わたしは真っ先にお月さまを探す。
揺れる木々の向こう側、あるいは草茫々の空き地の上とか、屋根の上、路地の先なんかに、ぽっかり浮かぶ月を見つけると、幸せな気分になる。

春とも夏ともいえない、洗濯にはうってつけの夜に、何気なく呼ばれたような気持ちになって振り仰ぐと、約束ごとのように佇む月を発見したりする。

なにものにもかえられない至福のひとときだ。

この人は自分だけのために、輝いてくれているのだ、と錯覚してしまうほどの幸福を感じてしまう。

そのまま、月に付き添われてアパートまで散歩だ。

住宅地の小さな十字路のマンホールの上で、振り仰ぐ。

薄暗い路地裏に燦然と輝く自動販売機の前で、振り仰ぐ。

一台も車の停まっていない月極め駐車場の真ん中でも振り仰いでみる。

――いた。

やっぱりわたしに寄り添っている。

優しくて、大きな人。

思わず目が合い、わたしははにかんでしまう。

そういえば、どんな時も、どんなに苦しい時にも、月がそばに寄り添っていた。

お父さんが不意に他界したあの日も、月はわたしを見つめていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その光はてらうことなくまっすぐわたしに降り注いでいた。
月の光を浴びている間は、悲しみが浄化された。
青白い月光は皮膚に染み入るように、わたしの肉体に入り込み、その中心にそびえる心の塔を照らすのだった。

すみません、ちょっと、と女の人に声をかけられた時もやはり夜で、空には皓々と輝く月があった。
黄色い大きなまんまる月で、神社の杜の上で柔らかく灯っていた。
高校時代の友達と呑んだ帰りで、わたしはほろ酔いかげんだった。
——あなたのこと、よく見かけるけど、この辺りにお住まいなの？
女の人の口調があまりに親しげなので、
——すぐそこの、神社の裏に。
と正直に答えてしまう。
祭りが終わったばかりで、道や、商店の店先や、歩道や空き地のそこかしこに、夏の終わりを引きずる余韻のような匂いが残っていた。

じゃあ、近いわ、とその人は言い、ほほえんでみせた。
――わたしの家は神社の真正面の、ほら、大きな銀杏（いちょう）の木が立っている家、ご存じない？
知っています、と素早く返事をしたのには、ちょっとしたわけがある。
その銀杏の木は紅葉の季節にまっ黄色に染まって、色のない住宅地の中でひときわ周囲の目を引いていたのだから。
でも、気になったのはそれだけではない。
――あの銀杏がすごく気になって、いつも立ち止まっては見上げているんです。あの家の方なんですね？
女の人は上品に笑って、
――ええ、あの家の者よ。
と言った。
銀杏の木の大きさといったらなかった。
道を挟んだ神社側には木々が繁っていたが、その反対、住宅地側には銀杏の木が一本あるだけ。

なのに銀杏は決してその存在感において負けてはいなかった。
大きなお屋敷で敷地は低い塀に囲まれている。
銀杏はその塀の内側にあった。
夜になると、屋敷の二階の窓に、いつも神社の方角を見つめる人影が見えた。
そうだ、わたしが気になったのは、むしろ銀杏よりも、その人影のほう。
暗くてよく分からないのだが、男性のようだった。
それも若い人……。
昼間はたいてい、窓は閉め切られているが、夜は開放されていた。
その人は杜の上に見える月を見つめていることが多かった。
もうずいぶんと前から、わたしはその人の存在を知っていた。
銀杏を見ていると、その人が窓辺に立った。
銀杏と月は、その人の印象と重なっている。
あの屋敷の人なんだ……。
――お急ぎ？
わたしは、いいえ、とかぶりを振った。

――じゃあ、お月さまも綺麗(きれい)だし、ちょっとそこでビールでもいかが？
女の人はそう言って、角の焼きとり屋を指さした。
歩道に並べた丸椅子に座った若者たちが楽しそうに杯(さかずき)を交わしている。
わたしたちは昔からの知り合いのように、向かい合って丸椅子に腰かけ、道を挟んだ駐車場の、さらに向こう側、神社の杜の上にかかるまんまる月を見上げた。
――お月さま、綺麗ね。
女の人はビールをおいしそうに呑んだ後、そう言った。
まーちゃんより少し年上かもしれない。
でも、とっても美人だ。
黒目が大きくて、見つめられると引き込まれた。
――あなた、お月さまのこと大好きでしょ？
思わず、はい、と戻してしまう。
――だと思った。
――小さい頃から、ずっと気になっていました。気がつくと、いつもそばに月がいる。見守られているような気がしたものです。でも、なぜ？

女の人はほほえみ、
——やっぱりね。じゃあ、絶対気が合うと思う。
と不思議なことを言う。
——誰と？
すぐに訊き返したが、女の人は笑うばかりで教えてはくれなかった。
でも、わたしはなんとなく、あの窓辺に立つ人のことではないか、と思えて仕方がなかった。
その後は、はぐらかされるように、逆にたくさんの質問を浴びせられてしまった。
子供の頃のことや、家族構成、大学のことや、それから恋人についてまで。
——恋人はいません。まだ一度も男の人のことを好きになったことがなくて、そのことでよく悩みます。
正直にそう告げると、女の人は口元に柔らかい笑みを浮かべてみせてから、言った。
——大丈夫よ。いつかきっと素敵な恋ができるわ。
ほんとですか、とわたしは訊き返していた。

ほんとよ、とその人は言った。

――あなたみたいな人はね、気がついたら、目の前に生涯の相手がいるものよ。でも、見失いやすいのも事実。注意深く人生を眺めておく必要があるわね。

小一時間、まるで面接試験のようにあれこれ質問をされた後、折り入ってお願いがあるんだけど、と話を切り出された。

要約すると、アルバイトの誘いを持ちかけられたのだった。

それは、彼女の息子さんの話し相手になってもらえないか、というもので、わたしはすぐにぴんときた。

あの人のことだ……。

興味があった。

週に一回、一時間程度の仕事だ、と言われた。

提示されたバイト代はそれほど高額なものではなかったが、好奇心にかられて、承諾してしまう。

大学もつまらなかったし、ほかにアルバイトをしているわけでもなかったし、何より、あの窓辺の人影のことが気になっていたから。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com